

JRC NEWSLETTER

Volume 1 No 1. July 17, 2017



Japan Resuscitation Council

目次

JRC Newsletter 創刊にあたり	1
一般社団法人 日本蘇生協議会 代表理事 野々木 宏（静岡県立総合病院）	
JRC オンラインジャーナルの発刊に当たって.....	2
一般社団法人 日本蘇生協議会 執行理事 坂本 哲也（帝京大学医学部）	
JRC15 周年を振り返って	3
一般社団法人 日本蘇生協議会 名誉会長 岡田 和夫	
Welcome Message	4
President, Resuscitation Council of Asia (RCA) Dr. Tzong-Luen Wang	
第 10 回日本蘇生科学シンポジウムを開催するにあたって.....	5
第 10 回日本蘇生科学シンポジウム会長 板橋 家頭夫（昭和大学医学部）	
第 10 回日本蘇生科学シンポジウムを開催するにあたり	6
第 10 回日本蘇生科学シンポジウム実行委員長 細野 茂春（日本大学医学部）	
第 10 回日本蘇生科学シンポジウムプログラム	7
JRC 蘇生ガイドライン 2015 の解説	8
一般社団法人 日本蘇生協議会 代表理事 野々木 宏（静岡県立総合病院）	
編集後記	
一般社団法人 日本蘇生協議会 事務局長 永山 正雄（国際医療福祉大学医学部）	

JRC Newsletter 編集委員会

<編集長>

野々木 宏（静岡県立総合病院）

<編集委員>

菊地 研（獨協医科大学病院）

世良 俊樹（県立広島病院）

武田 聡（東京慈恵会医科大学）

永山 正雄（国際医療福祉大学）

JRC Newsletter 創刊にあたり

一般社団法人 日本蘇生協議会 代表理事
静岡県立総合病院 野々木 宏



日本蘇生協議会（JRC）は国際蘇生連絡委員会（International Liaison Committee on Resuscitation, ILCOR）への窓口として、2002年1月18日日本学士会館にて第1回日本蘇生協議会委員会が、12団体および関連3団体により開催された。この日をもってJRCの設立日とすることになった。今年は設立から15周年の節目であり、一般社団法人化とともにホームページの充実と共に、広報誌としてJRCオンラインジャーナル「JRC Newsletter」が創刊されることとなった。第1号は、第10回J-ReSS（Japan Resuscitation Science Symposium、日本周産期・新生児医学会 板橋家頭夫会長）に合わせて冊子とオンラインジャーナルとしてホームページ掲載されている。

ILCORがコンセンサス作成の方針をこれまでの5年毎の改定から、重要なトピックについて連続した作成と公開へと変更した。今後の新しいガイドラインへの展開や課題について、いち早く国内の関係者へお届けするために本誌が役立つことを願っている。昨年はアジア蘇生協議会（RCA）で初の共通ガイドラインである「RCA Adult BLS algorithm for lay rescuers」が発表され、今年は急性冠症候群がRCAで作成される予定である。ますます国際連携の推進も期待されているため、本誌は英語版も出版予定である。将来的には、英語ジャーナルとして蘇生に関わる原著掲載のオンラインジャーナルを目指す予定である。

本ジャーナルが今後の蘇生科学の国内外における情報発信の中核となり、わが国の救急蘇生活動の推進力となるよう期待するとともに、多くの読者の方々の御支援をお願いいたします。



JRC オンラインジャーナルの発刊に当たって

一般社団法人 日本蘇生協議会 執行理事
帝京大学医学部 坂本 哲也



一般社団法人日本蘇生協議会（Japan Resuscitation Council：JRC）業務執行理事として JRC オンラインジャーナルの発刊に当たり一言ご挨拶申し上げます。本誌が会員各位に対する価値ある情報源になればと期待しております。

本法人は、平成 26 年 10 月 2 日に、それまで任意団体であった日本蘇生協議会が発展的に法人化され設立されました。その目的は、「救急蘇生科学に関する学理および応用について研究、知識の交換、会員相互および内外の関連諸団体との連携協力等を行うことにより、救急蘇生科学の進歩と発展を図り、もってわが国における蘇生教育の啓発・普及ならびに安心して安全な市民生活の創造に貢献すること」とされています。

JRC は、わが国の蘇生科学について研究、教育、実践の中心となっている学術団体ならびに医療関連団体に正会員としてご入会いただき、法人の社員として支えていただいております。また、日本医学会に加盟している 122 の分科会の中で、救急蘇生領域を主に扱う日本集中治療医学会、日本麻酔科学会、日本救急医学会、日本循環器学会、日本周産期・新生児医学会から理事を推薦いただき、役員として会務にあたらせていただいております。また、これらの学会には日本医学会に加盟していない日本臨床救急医学会、日本小児救急学会、日本神経救急学会、日本小児科学会、日本蘇生学会と共に、JRC 蘇生ガイドライン 2015 の作成において作業部会を運営し多大な貢献をいただきました。

公益性の高い一般社団法人である JRC は、各団体や企業との関係で透明性の高い運営が求められることになります。私も業務執行理事として法人を代表する代表理事の業務を分担執行し、責任を持って健全な運営を図っていく所存です。関係の皆さまにおかれましては、今後とも、何卒、JRC への変わらぬご支援を賜れば幸いです。よろしくお願い申し上げます。



JRC15 周年を振り返って

一般社団法人 日本蘇生協議会 名誉会長

岡田 和夫



JRC 設立から 15 年を迎えるこの記念する年に online journal「JRC Newsletter」が創刊されるのはおめでたく、JRC の活動が one step 進んだこととなります。JRC の立ち上げを記しまして流れを俯瞰させていただきます。

1998 年ころから AHA Guideline の準備会議に参加する招待状が届き始め、欧州からも参加しないかとの招請状が来ていた。日本はこれまで海外との交流はなく、独自の道をばらばらに各学会が指針、手引書を出していた、赤十字が市民向けの指針を最初に出したあとに、学会が続いていた。米国では JAMA に AHA の CPR Standards、次に Guideline を何年かごとに発表されて、1960 年に P. Safar 教授の ABC 法も広く世界に普及していて、正式な国内の受け入れ口がないと 国際標準から取り残された国になってゆくという危機感が沸いてきていた。救急医療財団の大塚理事長（当時）は厚生省の意見で海外の参加になるのは好ましくないとの意見で、救急医療委員会では、財団から分離した団体が望ましいとの意向を決定して、委員会を中心とした日本蘇生協議会 (JRC) を設立することになった。この決定会議が厚生労働省の会議室で行われたことから、厚生労働省が蘇生に関する枠組みづくりを海外の情報なしに進めることに危惧を抱いていることを痛感した。2002 年 7 月に第 1 回 日本蘇生協議会の設立会議を設け、創設が決定された。

財団の救急医療委員会のメンバーを中心に創立委員によって合意されたが、ゼロからのスタートであって、財政的援助は財団ほかどこからも支援がない立ち上げであった。委員長に岡田が任命され事務局をとりあえず帝京大麻酔科内に置き、麻酔科医局の秘書に事務を担当してもらって始まった。(1999 年の AHA Guidelines 準備会議が 2 回あり、ダラスに山本日本医大教授当時)、美濃部財団常任理事、岡田、循環器学会からが参加した。ゲラはほとんどできていて、世界に広める目的もあってアジアほか中南米、ほか多くの国の代表が 2000 年の刊行決定会議に参加していた。ここでアジアから韓国、台湾、シンガポールの代表と出会ったのもその後のアジア蘇生協議会の立ち上げが円滑にいくのに役立った。

2000 年にベルギーのアントワープで ERC 学会で国際蘇生 連絡委員会 (ILCOR) があり、日本から代表としてオブザーバーの資格で参加したが日本の代表であって、JRC の代表ではなかった。英語もたどたどしく、会議に始めて参加して、Norway の Steen 教授、France の Carli 教授を知っていたので助けられたが、痛烈な質問攻めにあった。シンガポールの Dr. Lim も同席していた。国際という名前にふさわしく参加団体を増やしたいが、実体のない国、地域の加入は意味がないという考えを示された。この ERC 学会で Becker 教授、Idris 教授が講演し、それ以来の付き合いになったので人脈形成は大切と感じている。

2001 年に Norway の Stavanger で ILCOR 会議、Symposium が開催されて、Utstein 修道院で 4 日の滞在で、下手な英語でも face-to-face 会議で顔を合わせると、なじみができてきて、ERC Chair の Prof. Chamberlain (この会で Nolan から co-chair になった)、Montgomery Co-chair のほか Dr. Bosaeart, Dr. Pascal, Dr. Zaideman らと知己になった。オブザーバーなのは日本だけで 2002 年のメルボルンの ILCOR 会議で参加団体に加えるので、必要資料を準備、送ってくれといわれ、Nolan, Montgomery 両 Co-chair に送付して メルボルンの 2002 年の ILCOR 会議に臨んだ。承認は 5 分で終わるのが 1 時間も待たされ Nolan, Montgomery が 申し訳ないが単一国の加入はしないと定款を変えたのでアジアをまとめた蘇生協議会を立ち上げてからにしてとの結論だと告げられた。不本意であったが アジアの参加者はいなくなりました。

2003 年ブダペスト、2004 年ヨハネスブルグ、フロレンス で開催された。2005 年は 2005 CoSTR の発行と JRC Guidelines の作成で大変であったが、AHA 会議の始まる直前に名古屋で愛知医大野口宏教授の努力で、愛知万博にあわせてアジア蘇生協議会の創立の会を設けていただけ、設立された。2005 年の AHA 会議に非公式に話した。JRC の加入学会の代表は年毎に交代するので、相談できる人がいなくて岡田が 1 人で海外、国内を捌くのは限界に来ていた。ここで日本循環器学会の支援が得られることになって、相談出来るようになって組織として確立されてきた。事務局も今の場所に固定させてもらうようになったのも振興会のおかげであり感謝している。

2006 年の ILCOR 会議が Stavanger で開催され RCA が全員の拍手のもと正式会員になった。2010 CoSTR 作成委員に RCA から代表岡田 Dr. Lim が同伴参加して RCA、JRC の独自ガイドラインの作成も正式に可となった。

以上が JRC の立ち上げから 2005 年版までの流れであるが、当時を知る人が少なくなってきたので歴史を紹介させていただいて責を果たしたい。



Welcome Message

President. Resuscitation Council of Asia (RCA)

Tzong-Luen Wang, M.D., Ph.D., F.E.S.C., F.A.C.C.



Dear members and colleagues,

On behalf of the Resuscitation Council of Asia (RCA), it is my greatest honor to invite you to join us to celebrate the 10th anniversary of RCA.

RCA has been founded by Japan, Singapore, Korea and Taiwan in 2006. In the past decade, we have many new partners including Thailand, Philippine, Malaysia and Hong Kong to attend RCA to promote Asian collaboration in resuscitation science. There are more and more experts from RCA to attend International Liaison Committee on Resuscitation (ILCOR) task forces to complete the revision and updating of resuscitation guidelines in 2010 and in 2015. We have also recently established the first RCA version of adult basic life support algorithm. All of these are honorable achievements contributing from distinguished leadership of the presidents, Professor Okada and Professor Lim, as well as great efforts of all RCA members. It's my pleasure and privilege to appreciate the success created by our honorable friends of RCA.

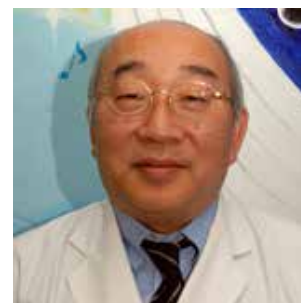
In the next ten years, we will be more engaged in international collaboration such as data registry, RCA advanced life support guideline built-up, promotion of resuscitation training and education, and requirements of international training centers. As ILCOR is changing its policy and strategies in the process of evidence review in task forces, we'll be more actively in the whole process of strategy establishment, evidence review, guidelines build-up, and other important tasks to maintain RCA the leading role in the world. We do right thing, and also do thing right. Best wishes to RCA.



第 10 回日本蘇生科学シンポジウムを 開催するにあたって

第 10 回日本蘇生科学シンポジウム会長

昭和大学医学部小児科学講座 板橋 家頭夫



日本蘇生科学シンポジウム（Japan Resuscitation Science Symposium : J-ReSS）は、蘇生科学の進歩発展を図るために American Heart Association で開催されている ReSS に準じて開催される学術集会であり、日本蘇生協議会（JRC）参画学会の学術集会に同時開催しています。第 10 回 J-ReSS は日本周産期・新生児医学会が担当させていただくことになりました。

メインテーマは「領域を超え発展する蘇生科学」として 2 つのシンポジウムと特別講演を企画しています。

シンポジウムの一つ目は日本周産期・新生児医学会が担当することから「母体救命を考える」といたしました。

二つ目は 2015 年 10 月 16 日に国際蘇生連絡委員会（ILCOR）のコンセンサス（CoSTR）に基づいた救急と蘇生に関するガイドライン「JRC 蘇生ガイドライン 2015 オンライン版」が世界同時に発表されたことから、これらを踏まえ「ガイドライン 2020 年に向けての課題」として各領域の先生からご発表いただく予定です。

特別講演には新生児蘇生法（Neonatal Cardio-Pulmonary Resuscitation）プログラムの確立・普及にご尽力された田村正徳先生に「NCPR の歴史と現状」としてご講演をお願いしております。

第 10 回 J-ReSS が我が国における蘇生科学の推進のための重要な会議となることを、期待いたします。



第 10 回日本蘇生科学シンポジウムを 開催するにあたり

第 10 回日本蘇生科学シンポジウム実行委員長

日本大学医学部小児科学系小児科学分野 細野 茂春



日本蘇生協議会が設立され 15 周年の年に日本周産期・新生児医学会が担当で第 10 回日本蘇生科学シンポジウムを 2017 年 7 月 17 日に横浜で開催させていただくこととなりました。日本周産期・新生児医学会は、胎児、新生児ならびにそれに関わる母性、母体に関する医療、研究水準の向上を図ることを目的としています。当学会としては「すべての分娩に新生児蘇生法を習得した医療スタッフが新生児の担当者として立ち会うことができる体制」の確立を目指し、2007 年 7 月から新生児蘇生法（NCPR）普及事業をスタート致しました。2007 年に日本蘇生協議会に加盟して 2015 年から理事加盟団体として国際蘇生協議会の CoSTR に基づいた蘇生法ガイドラインの新生児領域の作成を担当しガイドラインに則した講習会事業を運営しています。

このたびのシンポジウムを開催させていただくにあたりメインテーマは「領域を超えて発展する蘇生科学」としました。2つのシンポジウムと特別講演を企画致しました。シンポジウムの一つ目は日本周産期・新生児医学会が担当することから「母体救命を考える」といたしました。集中治療を専門とされている先生方と妊産婦の特殊性を踏まえた母体救命のあり方について御議論いただければと思います。2つめのテーマは「ガイドライン 2020 に向けての課題」といたしました。2020 年の改訂に向けて各領域での課題を御発表いただき、解決するための方策を御議論いただければと思います。

特別講演は田村正徳先生に「NCPR の歴史」と題してご講演を賜ります。田村先生は新生児蘇生法委員会を組織し、国際蘇生法連絡委員会の新生児部門の Task Force として CoSTOR 作成に関わり 2007 年 7 月から始まった新生児蘇生法（NCPR）普及事業設立にご尽力されました。田村先生の業績の一端としてご講演いただきます。

多数の皆様のご参加と活発な議論を期待致します。

第 10 回日本蘇生科学シンポジウムプログラム

9:00~9:05	開会挨拶 板橋家頭夫（第 10 回 J-ReSS 会長、昭和大学医学部小児科学講座）
9:05~9:15	JRC 代表理事挨拶 野々木 宏（静岡県立総合病院）
9:15~11:45	シンポジウム 1 「母体救命を考える」 座長：池田智明（三重大学医学部産科婦人科学教室） / 石川 源（日本医科大学千葉北総病院女性診療科・産科） 妊産婦死亡の現状と課題 長谷川潤一（聖マリアンナ医科大学産婦人科） 妊産婦の心停止に対する対応 照井克生（埼玉医科大学総合医療センター総合周産期母子医療センター） 妊産婦の心停止に対する救急医から見た対応 櫻井 淳（日本大学医学部救急医学系） 妊産婦心停止についての対応における JRC ガイドラインと他国のガイドライン上の推奨の違いについて 山下智幸（日本赤十字社医療センター救急科） 我が国の死戦期帝王切開の実態 室月 淳（宮城県立こども病院産婦人科） J-CIMELS について 関沢明彦（昭和大学医学部産婦人科学講座） <総合質疑応答（11:15 ~ 11:45）>
11:45~12:00	休憩
12:00~13:00	ランチョンセミナー 共催：マシモジャパン株式会社 座長：茨 聡（鹿児島市立病院総合周産期母子医療センター新生児内科） 周産期鎮痛における呼吸数の重要性～非侵襲モニター RRA® を中心に～ 柿沼孝泰（東京医科大学麻酔科学分野） 新生児医療における非侵襲的モニタリング 伊藤直樹（帝京大学医学部小児科学講座）
13:00~13:15	休憩
13:15~14:00	特別講演 NCPR の歴史 田村正徳（埼玉医科大学総合医療センター総合周産期母子医療センター） 座長：茨 聡（鹿児島市立病院総合周産期母子医療センター新生児内科）
14:15~17:15	シンポジウム 2 「ガイドライン 2020 に向けての課題」 総合座長：野々木 宏（静岡県立総合病院） / 細野茂春（日本大学医学部小児科学系小児科学分野） BLS（一次救命処置） 座長：坂本哲也（帝京大学医学部救急医学講座） 演者：畑中哲生（救急振興財団救急救命九州研修所） ALS（成人の二次救命処置） 座長：森村尚登（東京大学医学部附属病院救急部） 演者：笠岡俊志（熊本大学医学部附属病院救急・総合診療部） <座長入れ替え（14:45 ~ 14:50）> NEO（新生児の蘇生） 座長：細野茂春（日本大学医学部小児科学系小児科学分野） 演者：杉浦崇浩（豊橋市市民病院小児科） PLS（小児の蘇生） 座長：松裏裕行（東邦大学医療センター大森病院小児科） 演者：黒澤寛史（兵庫県立こども病院集中治療科） <ポスター演題閲覧（15:20 ~ 15:50）> ACS（急性冠症候群） 座長：田原良雄（国立循環器病研究センター冠疾患科） 演者：菊地 研（獨協医科大学救命救急センター集中治療室） NR（脳神経蘇生） 座長：永山正雄（国際医療福祉大学医学部神経内科学） 演者：横堀将司（日本医科大学付属病院大学院医学研究科救急医学分野） <座長入れ替え（16:20 ~ 16:25）> FA（ファースエイド） 座長：加藤啓一（日本赤十字社医療センター麻酔科） 演者：田邊晴山（救急振興財団救急救命東京研修所） EIT（普及教育のための方策） 座長：石見 拓（京都大学環境安全保健機構健康管理部門・附属健康科学センター） 演者：武田 聡（東京慈恵会医科大学救急医学講座） <総合質疑応答（16:55 ~ 17:15）>
17:15~17:25	JRC Okada Award 表彰 岡田和夫（日本蘇生協議会名誉会長）
17:25~17:30	閉会挨拶 細野茂春（第 10 回 J-ReSS 実行委員長、日本大学医学部小児科学系小児科学分野）



JRC 蘇生ガイドライン 2015 の解説

一般社団法人 日本蘇生協議会 代表理事
静岡県立総合病院 野々木 宏



1. ILCOR と JRC 設立について

1992年に設立された国際蘇生連絡委員会 (International Liaison Committee on Resuscitation, ILCOR) への日本からの参画は、2002年に日本蘇生協議会 (JRC) が設立され、更にアジア蘇生協議会 (RCA) が2005年設立されて初めて可能となった (図1-1)。2017年は、JRC 設立15周年の記念の年である。

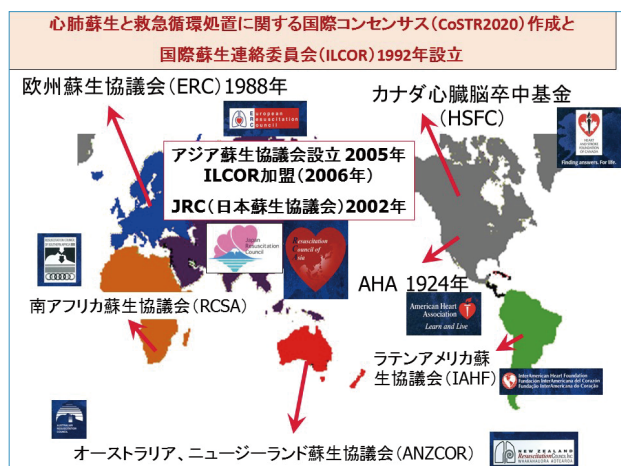


図 1-1

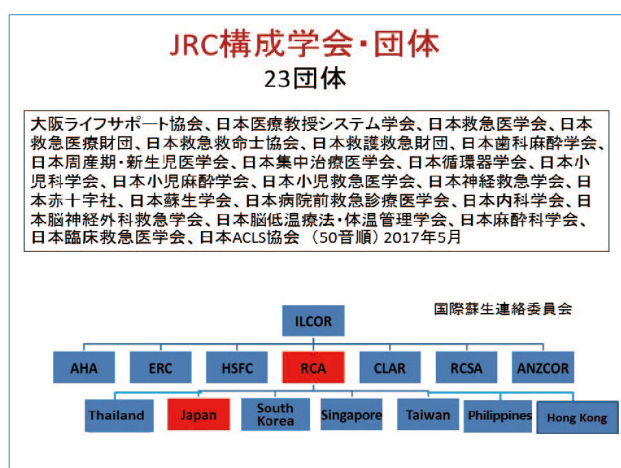


図 1-2

2015年にJRCは一般社団法人化し、23団体で構成され、またアジア蘇生協議会は日本を中心に7カ国が加盟している (図1-2)。

国際ガイドラインとJRCガイドラインの経緯を下段に示す (図1-3)。

1974年から米国心臓協会 (AHA) が6年毎に蘇生ガイドラインを発表し、各国が使用していた。その後ILCORが設立され、2000年からは国際ガイドライン作成、2005年には国際コンセンサス (CoSTR) が発表され、このコンセンサスに基づき ILCOR 加盟各国がガイドライン作成をすることとなった。2010年からはJRCがRCAの一員として加盟後、CoSTR作成に正式メンバーとして参画し、JRC 蘇生ガイドライン 2010、2015 を作成した。

2017年から、これまでの5年毎のCoSTR作成方針から、選択されたトピック毎にエビデンス評価とCoSTR作成が行われる方針へ変換された。また2015年からは国際的なガイドライン作成方法であるGRADE方式が採用されている。

国際ガイドラインとJRCガイドライン作成の経緯

1. AHA Guidelines for CPR and ECC (1974, 1980, 1986, 1992)
2. Guidelines 2000 for CPR and ECC (2000)
ILCOR (国際蘇生連絡委員会) による国際ガイドライン国内の方法を統一、JRC (日本蘇生協議会) を設立
3. CoSTR2005 勧告 (ILCOR)
日本版ガイドライン作成 (救急医療財団、日本医師会)、
JRC蘇生ガイドライン2010作成 (JRC、救急医療財団)
4. CoSTR2010作成、日本から正式参加
JRC蘇生ガイドライン2010作成 (JRC、救急医療財団)
5. CoSTR2015作成、JRCからTask Forceへ GRADEシステム
JRC蘇生ガイドライン2015作成 (一般社団法人JRC)



2017年5月アデレード、2017年11月アナハイム
連続したエビデンス評価とCoSTR作成
● SR(systematic reviewer)とKSU(Knowledge Synthesis Unit)が網羅的検索とGRADE評価を行う
● Task ForceはPIGOの決定やGRADE評価結果を用いてCoSTRを作成する。

図 1-3

2. 心肺蘇生の歴史

現行の心肺蘇生は1960年に確立された(図2-1～図2-3)。それまで実施されていた様々な呼吸法より口対口人工呼吸法が有効であることがPeter Safarにより確立された。またジョンスホプキンス大学のKouwenhovenらの循環器グループが胸骨圧迫と除細動の確立を行った。



図 2-1



図 2-3



図 2-2



図 2-4

3. 蘇生ガイドライン作成について

ILCORによるCoSTR2015は、GRADEシステムを導入して2010年から5年後に3年かけて作成された。JRCから5名のTask Forceメンバーが派遣された。

2017年新たなCoSTR作成へ各国からTask Forceメンバーが選出され、JRCから7名のメンバーと網羅的検索者とその候補者として5名が選出された(図3-1)。

ILCORは、これまで5年ごとのCoSTR作成と各国のガイドライン作成であった。そのため膨大な作業をまとめて実施することのTask Forceの負担やエビデンス

の反映が遅れるという欠点があった。

その問題点を解決するため、エビデンスの網羅的検索と評価を行うチームを内部検索者と外部委託チームを構成し、その結果でCoSTRを作成するTask Forceに分けられた。その上で、連続したエビデンス評価とCoSTR発表が行われることとなった(図3-2)。

毎年CoSTRサマリーとして発表され、それに応じて各国のガイドライン作成が検討されることとなった(図3-3)。

JRCは2017-2020年間で、ガイドライン勧告を検討するガイドラインパネルを構築する予定である(図3-4)。

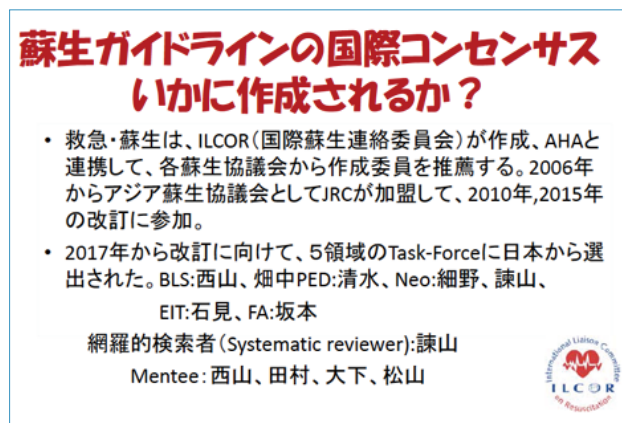


図 3-1

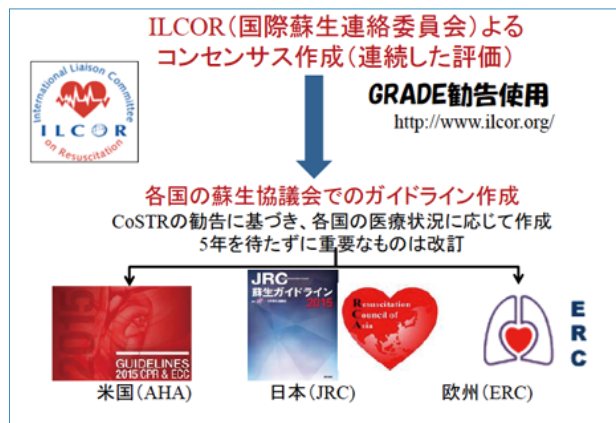


図 3-3

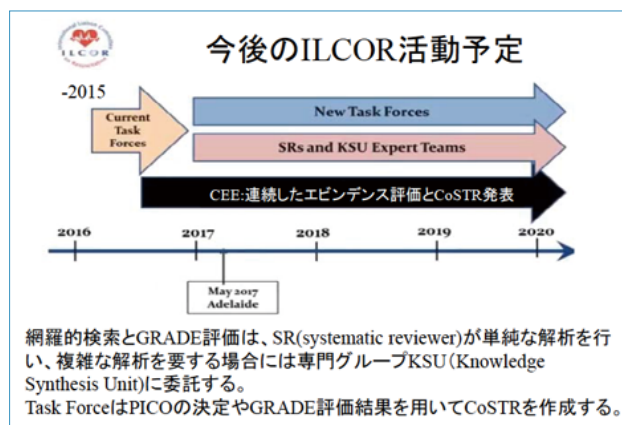


図 3-2

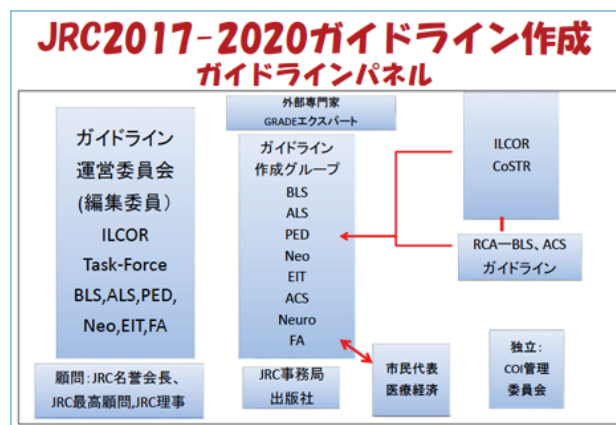


図 3-4

4. 心拍再開後集中治療の標準化とトレーニング

心原性心停止に対する心拍再開後集中治療は、循環器医を中心としたチーム医療が必要であり、救急医や集中治療医の連携も必要である。迅速で安全にチーム医療を実施するためにはチームトレーニングと実施マニュアルが必要である。そこで、心拍再開後チーム医療の普及啓発のため、日本循環器学会救急医療委員会と日本蘇生協議会にて、トレーニング用テキストを発刊し心拍再開後ケアに関する実技トレーニングを実施している（図4）。講義は必要最小限として、心拍再開後の集中治療に必要な手技をローテーションで受講する。実技1：呼吸管理

で様々な気道確保の方法、実技2：神経蘇生に必要な脳波モニタリングの読影方法、実技3：神経学的な理学的な所見の取り方、瞳孔の観察方法、実技4：循環管理として模擬回路を使いPCPSの穿刺方法、カニュレ挿入法や回路の組み立て、プライミングを学ぶ、実技5：体温管理療法の様々な器材の適応と扱い方、実技6：VFから心拍再開までのシミュレーションでのチーム蘇生、実技6：VF持続例でのPCPSを用いた蘇生（ECPR）と心拍再開後の治療のシミュレーション。これらが全ての要素を取り込んだ心拍再開後治療のトレーニングである。1日で修了する企画で定期開催を行っている。（http://www.j-circ.or.jp/topics/20170320_pcas.htm）。



図 4-1



図 4-2

表

9:00	9:15	0:15	受付	
9:15	9:20	0:05	はじめに	
9:20	9:30	0:10	講義	オリエンテーション
9:30	9:35	0:05	移動	
9:35	10:05	0:30	実技1	心拍再開後の呼吸管理
10:05	10:35	0:30	実技2	神経蘇生：脳モニタリング
10:35	11:05	0:30	実技3	神経蘇生：神経所見の評価
11:05	11:45	0:40	講義	神経集中治療
11:45	11:55	0:10	移動	
11:55	12:45	0:50	実技4	適切な循環補助：PCPS/LABP
12:45	12:55	0:10	移動	
12:55	13:45	0:50	実技5	適切な体温管理療法
13:45	13:55	0:10	移動	
13:55	14:45	0:50	実技6	PCASシナリオ：VF→心拍再開
14:45	14:55	0:10	移動	
14:55	15:10	0:15	振り返り	
15:10	15:15	0:05	移動	
15:15	16:10	0:55	実技7	PCASシナリオ：VF持続（ECPR）
16:10	16:20	0:10	まとめ	まとめ/修了証授与

図 4-3

RRS求心系シミュレーション トレーニング

内容

院内の急変を防止するには、早期に気づく必要があります。そのノウハウをシミュレーショントレーニングにより習得するセミナーです。JRCと東京慈恵医大との共同開発でコース開催を行います。マニュアル作成も予定しています。

- ◆ 導入講義 「RRSトレーニングの重要性」
- ◆ トレーニングコース(2ブース)
病棟で経験するシナリオを用いてチームトレーニング
 - 呼吸停止 ● ショック
 - 意識障害 ● チームワーク
 - コードブルー(ハリーコール)



編集後記

一般社団法人日本蘇生協議会（JRC）創設から15周年を迎える本年、「JRC Newsletter」創刊号をお届けできることは大きな喜びです。本誌のビジョンを簡潔にご紹介致します。

JRCは、広く心肺脳蘇生の臨床、サイエンスに関わる学際的かつ公益性の高い学術団体です。2002年創設時から牽引してこられた岡田和夫名誉会長の行動力と情熱は、2014年に野々木宏代表理事、坂本哲也執行理事が率いる現体制に引き継がれました。その理念、活動を発信するために広報誌「JRC Newsletter」を企画しました。

当面、JRC ホームページにオンラインジャーナルとして年4回程度発行し、日本蘇生科学シンポジウム（J-ReSS）等開催の折には冊子版も発行して参ります。今夏以降、「JRC Newsletter English version」、「JRC Newsletter 市民版」も順次発行していく予定です。内容的には、「JRC 蘇生ガイドライン2015」に関する解説・情報、蘇生、蘇生科学に関する文献のエッセンス紹介も予定しています。将来的には、英文ジャーナルとして広く蘇生に関わる原著論文、レビュー等も掲載する予定です。

「JRC Newsletter」が、国内外における蘇生、蘇生科学の進歩、交流に資する価値ある情報源となるように、各位から忌憚ないご意見、ご支援を戴けますようお願い申し上げます。

一般社団法人日本蘇生協議会事務局長

国際医療福祉大学医学部神経内科学 永山 正雄

一般社団法人 日本蘇生協議会 参画団体一覧

NPO 法人 大阪ライフサポート協会	日本小児救急医学会
特定非営利活動法人 日本 ACLS 協会	日本小児麻酔学会
日本医療教授システム学会	一般社団法人 日本神経救急学会
一般社団法人 日本救急医学会	日本赤十字社
一般財団法人 日本救急医療財団	日本蘇生学会
一般社団法人 日本救急救命士協会	一般社団法人 日本内科学会
一般財団法人 日本救護救急財団	特定非営利活動法人 日本脳神経外科救急学会
一般社団法人 日本歯科麻酔学会	日本脳低温療法・体温管理学会
一般社団法人 日本周産期・新生児医学会	日本病院前救急診療医学会
一般社団法人 日本集中治療医学会	公益社団法人 日本麻酔科学会
一般社団法人 日本循環器学会	一般社団法人 日本臨床救急医学会
公益社団法人 日本小児科学会	

（五十音順）

一般社団法人 日本蘇生協議会 賛助会員一覧

＜団体＞	川澄化学工業株式会社
一般社団法人 日本医師会	大研医器株式会社
	日本光電工業株式会社
＜企業＞	フィジオコントロールジャパン株式会社
アイ・エム・アイ株式会社	株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン
旭化成ゾールメディカル株式会社	レールダルメディカルジャパン株式会社
アテナ工業株式会社	

（五十音順）

JRC NEWSLETTER Volume 1. No 1. 2017

<http://www.japanresuscitationcouncil.org/jrc-newsletter/>

2017年7月17日 発行

発行 一般社団法人 日本蘇生協議会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-5-4 (公財) 日本心臓血管研究振興会 附属榊原記念病院内

編集 一般社団法人 日本蘇生協議会 JRC Newsletter 編集委員会
編集協力 一般社団法人 アカデミックリサーチコミュニケーションズ (ARC)





一般社団法人

日本蘇生協議会

Japan Resuscitation Council